
ブースト・ブレード

九条蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブースト・ブレード

【Nコード】

N9560Z

【作者名】

九条蓮

【あらすじ】

機械類が発達した村・機重村で過ごすゲーマー高校生・佐藤セナ。彼はある日、自らが通う学校で配られたゲームディスクを起動した。それが、生徒全員を巻き込んだ、ログアウト不可能な世界への入り口とも知らずに……。

第一話：起動

今現在、俺はどこにいるのだろうか？

そう思い、一度目を閉じる。

そして、すぐ開ける。

でも、何も変わっていない。

目の前には唯一の親友だけ、それ以外は、

真っ暗な闇で覆われていた。

どうしてこうなった？

考える、考える、考える、考える、考える、考える。

数時間前

俺、佐藤セナさとうは、早朝に家を出た。

理由は、日直だから。

俺の住んでいる機重村きじゆうそんは、ある技術が発達している。

それは機械。

クーラーや、携帯電話・冷蔵庫・ストープ・などの、電化製品は当然。

車や、バイクなどの自動車。

すべてが最先端の機械ばかり。

そして、中でも一番すごいのは、パソコンとハードディスク。

ここは人口がとっても少ないのでパソコンによるカリキュラムを受けている。

まあ、出費を少なくするために二人で一台を使っているのだが。

さて、日直だから早く学校に行かなければいけないのは、パソコンを、クラスの人数の半数持っていかなければいけないのだ。

「失礼しま〜」

「今日は遅かったね〜。セナ君」

俺の声を遮ったのは、俺のクラスの担任である、
？咲モミジ。彼女はプログラミングの天才である。

「はい、これ、二十個あるから重いよ〜」

脳天気言いながら、パソコンの入った籠を出してくる。

「なら、手伝ってくれよ」

「いや」

即答だった。皮肉気味に言ったのに、一言で断わりやがった。

「あれ？ディスクはどうした？」

籠を受け取ると、いつもなら一緒に入ってるディスクがない事に
気付いた。

「ああ、それなら〜、あとで私が持って行くから〜」

「ふ〜ん……。了解」

「じゃ、また後で〜」

そう言っモミジと別れ、教室へ。

この学校は、数少ない人口の子共が通っているため、
学年など関係なしになっている。

生徒の総数は約、百二十人。

全学年あわせて百二十人ぐらいなのだ。

俺は教室のドアを開けて中を見ると先客がいた。

「よ、セナ。日直乙」

「そう思うなら手伝ってくれ。マコ」

彼は鈴木マコト。オタクである。

ちなみに、俺はゲーマーである。

「手伝ってもいいけどよ〜。条件がある」

「なんだ？」

こいつが条件と言うと簡単なものか、無茶なもの二つに分かれ

る。

「こないださ、新しいゲームを見たんだけど……」

「どんな感じのストリで、なんて題名だ？」

マコトの家はゲーム会社見たいなもので、

マコトは新作のゲームがどんなのが見れるのだ。羨ましい。

「題名はB、Bって書いてあった。ストーリーは……覚えてないや」

B、B……か。どんなだろう。

「んで、それがどうした？」

「ん、出たらさ、一緒に攻略してくれ」

「分かった。出たらお前と最初に攻略しよう」

俺はゲームナーな為、新作ゲーム等の攻略を手伝ってほしいとよく依頼されるのだ。

「んじゃあ、交渉成立つと」

「俺は左の方を準備するから、セナは右を」

「オツケー」

短い返事をして、準備に取り掛かった。

二人でやったおかげで、十分に終了した。

「ありがとう。助かった」

「どういたしまして」

礼を言ったらドアが開いた。

「おっはよ〜」

「……………」

入ってきたのは二人。

どちらも同年代の知り合い。

「今日はセナ君が日直だったんだね〜」

「マコが手伝ってくれたんだよ」

「へ〜。マコ君偉いね〜」

活発というか、元気というか、とにかく明るいこの子は、

東條アキ。マコトの思い人である。

「おはよう、ユナ」

「……………おはよう」

この、無口な子は柊ユナ。

俺の思い人である。

アキは明るく元気で、優しいので、ファンクラブもある。

また、ユナも無口だが可愛くて、背も低いので、ファンクラブがある。

「……………でさー」

「へー、そうなんだ。知らなかった」

すぐそこでマコとアキが会話していた。

いいなー。羨ましい。俺もユナと話したい。

「……………なあ、セナ」

「ん、な、なんだ」

いきなりでびっくりしたー。

でも、ユナから話しかけられるって初めてだな。

「……………セナがマコトの事が好きって……………」

「それはデマだ」

ユナが言い終わる前に断言した。

なんか、あれだ。

俺とマコが仲が良いってだけでそんな噂を誰かが立てやがった。

「……………そう、なのか？」

「ああ、そうだ」

「……………そうか、良かった」

最後の方は聞き取れなかったが、何故か安心したようだ。

しばらくユナと話していると、他の生徒の声が聞こえてきたので、
撤退。

俺達がこの二人と話しているのを知られたら、クラスの全員に殺される。

その後はマコと他愛もない話をした。
言っていないかったけど、俺とマコは席が隣だ。

チャイムが鳴り響き、暫くしてモミジが教室に来た。

「全員席についてる〜？今からディスク配るから〜」
そう言っでディスクを配っていくモミジ。

「先生、これって何のディスクですか？」

「これ〜？なんか〜B、Bって言っでたけど〜」

B、Bどこかで聞いた名前だな。

「おい。おい、セナ」

「ん？なんだ？」

小声でマコが話しかけてくる。

「B、Bって、ほら、朝話しただろ」

「ああ、そう言えばそうだな」

なんか新しいゲームのソフトで、マコと一緒に攻略するって約束
した……。

「っで、それって！」

「ああ、アレが本当にB、Bなら」

「これは、ゲームソフトって事か」

「そう言う事だ」

でもおかしいな、学校でゲームなんて、

校長はともかく、あの鬼理事長が許すわけがない。

「みんな〜、ディスクセットした〜？」

「やべ。早くセットしようぜ」

「ああ、分かった」

俺よりマコが作業した方が早いので、マコに任せる。

「よし、後は起動ボタンを押すだけだ」

マコの作業が終わっですぐに

「それじゃ〜、起動ボタン押して〜」

その声と同時に俺たちは起動ボタンを押した。

カチッ

そして、押した瞬間、目の前が真っ暗になった。

第二話：案内人

「そうだ、アレを起動させたから、俺はここにいるのか。」

「セナ、無事か!？」

「ああ、マコ、お前もいたのか。」

「まあ、無事でよかった。」

「ここはどこだ?。」

「多分だが、ゲームの中だ。」

その一言でマコは黙った。

そして、

「それって天国パラダイスじゃん!!。」

そう言っただけで喜び始めた。

「は?どうして?。」

「だってさ、考えてみる!俺達は今、どこにいる?どこにいる?。」

ゲームの中だとは思っけど……。って、

「完全フルダイブ……。」

「その通り!。」

完全ダイブとは、プレイヤーの意識は当然、

五感もゲーム世界に共通させる新システム……のはず。

「でも、それってあと三年はかかるって……。」

マコは少し考えて、

「……理事長。」

と、呟いた。

「あの鬼が?ないない。」

鬼もとい理事長は簡単に言えば、真面目でゲーム嫌いのロリコン。前にそう言ったら、思いっきりぶん殴られた。

「いや、あんまり否定は出来ないぞ。」

「どうしてだ?情報屋さん。」

マコは小学五年生から、情報屋なるものをやっている。依頼もされるそうだが、ほぼ一日で終わらせるスピード解決。それが売りらしい。

「いや、俺も聞いただけなんだがな」

「うんうん」

「実はあの理事長ゲームの」

「あの！すみません！」

マコの話は最後まで続かなかった。

理由は今俺達に話しかけた少女のせいだ。

「え〜と……。君は？」

話の最中に声をかけられ、マコはちょっと不機嫌気味。

「はい！案内役のリリイと言います」

「案内役？」

「ブースト・ブレードの世界への案内役です」

案内役のこの子、信用……できるのか？

マコにアイサインを送ると、“大丈夫”と帰ってきた。

「ふむ、では願います」

「分かりました！」

すると、少女は少し考えて、

「名前を書いてください」

紙とペンを出してきた。

「名前は偽名でも構いません。あと、書くのは名前だけでいいです」

俺は普通にセナと書き、渡す。

マコトの見たら、普通にマコトと書かれていた。

「では次に進みます。ついて来て下さい」

俺は彼女について行きながら、

「なあ、マコ」

「なんだ？」

「どうして名前を普通にしたんだ？」

当然の質問をした。

マコはオタクなのに何故、厨二病全開の名前にしなかったのか不思議である。

「あれは、俺じゃないからいいの。でも、今回は違っただろ」

まあ、やるのは実際の俺達だからなあ。

「着きました。道具の間です」

話している最中に目的地に着いたらしい。

入ってまず目についたのは、十種類の武器。

「まず、この中からメインとなる武器を一つ選んでください」

左から順に、

・片手剣・太刀・両手剣・双剣・鎌サイス・弓矢・棍棒メイス・長銃ライフル・双銃・杖ロッドだ。

「マコ、お前は何にする？」

「うーん」

一通り武器を見て、悩んだ末に、

「うん、両手剣だな」

両手剣にしたらしい。

じゃあ俺は何にするかな。

そう悩んでいると

「セナに両手剣譲ろうか？」

と、言われたので、

「いや、問題ない」

と即答した。

「俺は今、双剣にするか、鎌にするかで悩んでいるんだ」

双剣は動きとか速そうだけど、鎌は形状からしてカッコいいしなあ。

「うーん……。よし、決めた」

「どっちにするんだ？」

「双剣にする」

結局、後々の事を考えて、双剣にした。

メイン武器を選び終わるとリリイが

「メインが決まったようなので、次はサブ武器を一つ、選んでください」

なんて言った。

するとマコが、

「じゃあ、こんどはセナから決めるよ。まあ、鎌だと思っけど最初に選ばせてくれた。」

「ありがとさん。じゃあ……、長銃で」

「は？」

俺が決めるとマコは変な声を出した。

「どうした？マコ」

「どうしたじゃねーよ。今の流れだったら普通、鎌を選ぶだろ常考」

ああ、そうゆう事か。

さつき双剣か鎌で悩んでいたのに、なぜ長銃かって事か。

「いや、メインで近距離なら、サブは遠距離だろ」

遠近どっちにも対応できなきゃ、ゲーマー失格だしね。

「はあ。そうだったな、セナはゲーマーだったな。忘れてた」
忘れてられたらしい。俺の一番の特徴が。

「で、マコは何にするんだ？」

「俺？俺は……どうすつかなあ」

個人的には弓矢がおススメだけど、そんな事は一切口にしない。武器は自分が扱いたい物が一番なのだから。

「決めた。双銃にする」

マコはサブの武器を双銃に決めたそうだ。

「メイン・サブの武器が決まりましたので、次に移ります」

その後、俺達は好きな色や、嫌いな色、趣味や特技などを聞かれ

た。

「はい。大体は終了です。後は質問とかありますか？」
色々と聞かれ、質問タイムに。

「一つ聞きたい事がある」
最初に質問したのはマコである。

「ブースト・ブレードってどんな世界なんだ？」
まあ、当然の質問を言った。

「それは向こうで御主人様が言われます」

即答だった。まるで、こう聞かれたらこう言えって言われてみた
いに。

「俺からも一つある」

「何でしょうか」

「メインメニューはどうやって出すんだ？」

ゲーマーとして、これは聞かなければいけない質問。

これを知らないと初期装備でラスボスを倒す様なものだ。

「確か、念じれば出るはずです……多分」

多分って、案内役しつかりしろよ。

ひとまず、言われた通り念じてみた。

すると、目の前にモニターが現れた。

色んな操作をして使い方は大体覚えたので、モニターを消す。

の、だが。俺は嫌な予感がし、再度、モニターを出した。

「どうしたんだセナ。そんなに焦った顔をして」

マコが何か言ったが耳に入ってこない。

それよりも、俺はメニューを睨むように隅々まで見ていた。

「やっぱり……」

「ん？何がだ？」

俺の嫌な予感が当たってしまった。

最悪である。これは、最悪すぎる。

「おい……リリイ」

「はい。なんですか？」

「もう一つ、質問がある」

マコがこれ以上なんかあるのか？

そんな事を目で訴えてきたが、気にしない

「ログアウトのボタンはどこだ」

その一言で誰も喋らなくなった。

そう、メニューをどれだけみても、ログアウトのボタンがなかったのである。

「答える。リリイ」

彼女はため息をつき

「ログアウトのボタンはありません。なぜなら」

俺の思っていた事を言う。

「この世界はログアウト不可能です」

第三話：管理人

やはり、俺の予想は当たっていた。

マコはそんな事考えていなかったらしく驚いている。

「どう……すれば、戻れるんだ？」

やっと言った言葉、それはあっさりかわされた。

「それも、御主人様が言います」

「なんだよ……それ」

「?どうかしましたか？」

マコが何を呟いたのかリイには聞こえなかったらしい。

その行動が、怒りを買うものとは知らずに。

「なんだよそれ！」

そう言っつてリイに掴み掛かろうとするが、すり抜けた。

「言いませんでしたが、私には触れられません」

「マコ、お前の気持ちは分かる。だから落ち着け」

暫く宥めっているとマコが落ち着きを取り戻してきた。

「悪い。つい熱くなった」

「安心しろ。気にしてない」

俺は前にマコに助けてもらった。

情報屋のマコに……。

だから、こんな事は気にしない。

もつとも、本人に言ったら殺されかけないので言わないが。

「どうやら、準備が出来たようです。

セナ様、マコト様、後はここから少し歩けば」

「ブースト・ブレードの世界、か？」

「はい。その通りです」

リイが言い終わる前に俺が言ってやった。

さっきのマコに対する、小さな仕返し。

「それでは、私は消えます。さようなら」

そう言って、彼女は霧の様に消えて言った。

「そんじゃ、進むか」

そう言って、俺達は向かう。

ブースト・ブレードの世界へ。

しばらく歩くと、一筋の光が見えた。

俺達はその光に向かって歩く。

そして

大きな広場に出た。

いや、沢山の人がいる広場に出た。

「ここが……」

「ああ、ブースト・ブレードの世界だろ」

広場にいる奴らは全員何か不満を言っていたが俺には関係ない。

彼女は、どこに居るんだろうか。

俺は朝、話していた彼女の事を考えていた。

「あれ？セナ君とマコト君じゃん」

不意に、後ろから声をかけられた。

でも、警戒はしない。

聞きなれた声だから。

「ようアキ」

俺より先にマコトが反応した。

まあ、当然か。

「……………」

アキの斜め後ろで、ユナが此方を見ている。

「よ、ユナ」

俺はユナを見てある事に気がついた。

服装が変わっている。制服から、あれは……………ゴロリス……………かな？

髪も、水色から白になっているし。

アキは……何も変わらずでブレザー制服だった。

髪の色は茶髪から銀髪に。結構似合っている。

マコは……制服。指定の物ではなく、真っ黒の学生服。

髪は黒から赤になっている。マコのイメージカラーは赤だな。

俺は……と、メニユーからステータスを開いて見てみる。

髪の色は紺から蒼に変わっていた。

服は……。

こ、これは……！！

黒の私服……だと……！！

神は俺を選んだ……！！

そんな事を思っていたら服をクイクイっと引つ張られた。

そっちを向くとユナが顔を伏せながら服を掴んでいる。

とっても可愛い、頭を撫でたい。

「……………」

そんな事を思っていたらジツと見られていた。

瞳も黒から水色になっている事に気づく。

「どうした？ユナ」

「……………無事で良かった」

「本当、二人とも無事で良かった」

ユナ言葉に続いて、アキも同じことを言う。

「こっちとしては、お前らが無事で良かったよ」

マコが心底、安心した様に続く。

その後、俺達四人は他愛もない話をした。

『皆の者、静まれ』

暫くして、男っぽい低い声が、広場に木霊する。

だが、誰も話すのを止めない。

むしろ、今の声でざわめきが増している。

『聞こえなかったのか？静まれ』

そんな言葉が聞こえてなおも、ざわめきは止まらない。

『はあ、今喋っている者に、^{ペナルティ}罰を与える』

その声と同時に、ざわめきが消えた。

おかしい、あれだけの声が一度に消える分けがない。

『まず、大切な事を言っておく』

その言葉が始まり。

『一つ。この世界からログアウトする事は……不可能である』

また、ざわめきが起きた。

『騒ぐな。罰を与えるぞ』

そう言っつて、ざわめきは徐々に無くなる。

『二つ。この世界から出るには……この世界を攻略しろ。

それ以外に、この世界から出る事は不可能である』

攻略……ね。

まず、どんな世界なんだよ、ここ。

『この世界については、メニューのアイテム覧に、

パンフレットを入れておく』

後で確認しよう。

『あと、この世界のルールについても同様。

アイテム覧に入れておく』

『さて、何か質問のある者は拳手をしろ』

俺は……堂々と……手を……上げた。

『ほう。ではセナよ。質問を』

『聞きたい事は二つ。一つ、あんたは何者だ？』

『私か？私はお前達を連れてきた者の、主。』

この世界の管理人でもある』

管理人……ゲームマスターみたいなものか。

『もう一つは何だ？』

『もう一つは……』

俺は一度、深呼吸をする。

もしも、この予想が当たっていれば、

もう一つの脱出方が出来るのだから。

「あんたは今、どっちの世界の、どこにいる？」

『ほう、面白い』

一拍置いて

『私は今……いや、これからも、この世界に居る』

ユナが

「それがどうかしたの？」

と、小声で言ってきた。

俺は小声で

「重要なんだ」

とだけ、言っておく。

感ずかれてはいけないのだから。

そう言えば、ユナが普通に話しかけてきたのって、

これが初めてかもしれない。

「俺が聞きたいのはそこじゃない。あんたは今、

この世界のどこにいるのか。俺が知りたいのはそこだ」

その問いに、彼は暫く考え言う。

俺の考えていた通りに。

周りの人間には驚愕の事実を

『私は今、お前達と同じ場所に居る』

第四話：賭け

『だが、それがどうした？』

言っておくが、私はゲームの攻略には、手を出さん』

「そうかい。あんたが手伝うのなら、

ささつと終わると思ったんだが……」

周りにいる奴らはまだ、気づいていない。

管理人がいる事で、何が変わるかを。

「おい、セナ。どうゆう事だ？説明求む」

このマコでさえ、気づいていないのだ。

現段階、俺以外にこの事を知っている奴はいないと見ていい。

「あとでな。それより」

俺はマコに、この後の行動を伝える。

『それでは、他に質問も無い様なので、

カウントダウンがゼロになったら、ゲーム、スタートだ』

「まじか？」

「まじだ、伝えた通りに頼む」

『三』

後はカウントダウンが終われば、作戦スタートだ。

『二』

「……………セナ、何を話して」

「静かに、ユナ」

ユナが何か言おうとしたので、ひとまず制止しておく。

『一』

さあ、あと少しだ……！！

『ゼロ。ゲーム、スタート！』

「ユナ！」

開始されてすぐに俺は動く。

近くにいるユナを抱きかかえ、猛ダッシュをする俺とマコ。

マコはアキを抱っこしている。
そして、俺は頭の中の地図を見ながら走る。
走って数分後

「到ー着」

俺達は一つの宿に着いた。

「ユナー。下ろすぞー」

「……………分かった」

ユナを下して、宿を見る。

豪華ではないが、おんぼろでもない、普通の宿。

メニユーを見るときに、地図も見て、宿の場所を暗記しておいたのである。

宿を見ていると後ろから殺気が

「セナ君？これはどうゆう事かな？

説明を聞かせてくれる？」

「……………中に入ってからでいいですか」

「絶対よ」

危なかった。今は死ぬかと思った。

後ろからの視線をスル　しつつ、俺達は宿に入る。

「失礼しま　」

「いらっしやい！何部屋だい！？」

くそ婆が、殺してやるうか？

「一部屋、ダブルでいくらだ？」

「五十ウォンだよ」

「飯付きなら？」

「夜までなら、一人……………百五十ウォンだよ」

「なら、ダブルの部屋を三部屋。四人分の飯付きで」

「あいよ。合計で……………七百五十ウォンだよ」

メニユーから財布を取り、中から千ウォンを出す。

「毎度あり、お釣りの二百五十ウォンと、部屋の地図と鍵」
「確かに」

皆にアイサインを送り、部屋に向かう。

「左の部屋を、アキとユナ。

右の部屋を俺とマコで使う」

「真中はどうするんだ？」

「会議室にする。十分後、この部屋で会おう。解散」
そう言っ て部屋に行こうとするが

「どこ行くの？説明は？」

強力な殺意を向けられていた。

「十分後に説明するから、な」

「……分かったは」

そして、今度こそ俺は部屋に向かった。

「なあセナ、聞いていいか？」

「なんだ？」

聞かれている事は分かっている。

が、一応聞き返す。

「なんでこの世界の金を持っていたんだ？」
やっぱりな。

「メニューから、ステータスを開いてみる」

「？分かった」

疑問はあったが、マコはメニューを開く。

「あ！俺にも千ウォンある。なんでだ？」

「多分、管理人からの贈り物だと思うぞ」

「なるほど」

最初から金があるなんて、大抵の奴は知らないだろうな。
俺は自分の姿を見るときに気付いたがな。

「なあ、セナってスキル付いてるか？」

「それは確認してない」

「すぐさまメニューから、ステータスを開き、スキル一覧を見る。」

「二つあった」

「何てやつ？」

「こ、これは……！」

「“鍛冶屋”と“採取”のスキル」

「よっしゃー！店が開ける！金が稼げる！」

「マコは？」

ディフェンス

「ん〜。“DF二倍”と、“HP吸収”の二つ」

「お前の方が、役に立つな」

「なんだよ、それ、俺のスキルと交換しろし。」

「出来ないけど。」

「暫くの沈黙。」

「暇なのでパンフレットを見る。」

『この世界は四つの塔によって作られている。

北の塔・西の塔・東の塔・南の塔の四つである。

一つの塔につき、最悪でも地下百階まである。

一階ごとに、ボスとなるものがある。

それを倒す事により、次の階に行ける。

また、最下層のボスを倒す事により、次の塔へ行ける。

この世界についての細かいルールは、“世界のルール”を参照。

ダンジョンについては

パンフレットを見ていると不意に

「なあ、セナ」

「なんだ？」

「マコが話しかけてくれた。」

「今日さ、賭けをしないか？」

「何を何で賭けるんだ？」

「俺がアキに、セナがユナに、告白する」

一瞬の沈黙。

「はあ!？」

「んで、互いが互いのを成功するか、失敗するか、予想する」

「外したら？」

「二人とも外したら、ペナルティ罰無し。二人とも当たっても、ペナルティ罰は無し、どっちかだけが外したら、罰として」

マコは、面白い事を言う。

「一人で、この世界を旅する」

「その賭け」

次の一言は、マコにとって、予想外だっただろう。
俺は

「乗った」

第五話・告白

「ちよ、セナ。本当にいいのか？」

「？なんでだ？」

「なんでつて、俺は情報を持つてるけど……」

「そこまで言つて、言葉を濁すマコ。」

「はあ。情報屋かどうかは関係ない。」

「だから俺は断言する。」

「俺は“その”賭けに乗ったんだ」

「その一言でマコは黙る。」

「そうだな。セナはそう言う奴だったな」

「だろ。つと、時間だ。早く行こう」

時間になったので、俺達は真ん中の部屋に移動する。

マコはまだ知らない。

マコに助けってもらうまで、“俺”が何をしてたのかを……。

部屋の中を見ると、アキとユナはもうそこに居た。

「さて、セナ君。説明よろしく」

入ってそうそう、アキに満面の笑顔、

もとい、全開の殺気で迎えられた。

「説明つってもなー。外見れば分かるぞ」

「どうゆう事かな？」

「外を見てどうゆう状況が言葉にしてみ」

「え〜つと……」

アキが窓から外の景色を見る。

「大勢の人が走り回ってるけど……それが？」

「なんで走っていると思う」

少しの沈黙。

結果

「え、分かんないよ。私ゲームしないし」

「答えは、宿屋を探しているんだよ」

「?どうしてそんな事が分かるの?」

アキは本当に分からない様子。

ユナを見るが、首を傾げている。

「マコ、お前は分かるだろ」

「え、俺?」

突然振られて驚くマコ。

「そう、お前。説明頼む」

「俺よりお前の方が詳しいだろ」

「いいからいいから」

俺よりマコの方が、説明は上手いし。

「今の内に宿屋を取っておかないと、宿が全部

満員になったら、野宿って事になるだろ。」

少しでも休める場所がなければ、困るから皆必死で走ってる……。

「って事でいいのか?」

「百点」

文句なしの説明。

やっぱりマコに任してよかった。

俺だったらきつと、マコの二倍はかかっただろう。

「じゃあ、なんで何の説明も無しでここまで……その……」

「そこは謝る。いくら時間が無かったとはいえ、あれは酷かったな。」

ただ、それ以外に、方法が無かったんだよ」

「……分かったわ。納得した」

何とかアキの説得に成功する俺。

まあ、説得したのはマコなんだが……気にしない。

「ユナは質問とかあるか?」

「……ない」

「そうか。じゃあ、本題に入るぞ」

俺の真剣な表情で察したのか、誰も茶化したりしなかった。

「まず、パンフレットの内容を確認する」

「その後は？」

「自分の武器とスキルを言つて。」

午前中は自由時間。午後は攻略に使つて。

で、皆良いか？」

俺の問いかけに全員が頷く。

正直助かるな。すぐに決まるとありがたい。

「じゃあ、パンフレットを要約して読むぞ」

『この世界には四つの塔ダンジョンがある。

塔は各百階以上あり、一階事にボスモンスターがいる。

最下層のモンスターを倒せば、その塔は攻略完了となり、

次の塔への道が出来る。また、一度誰かが通った階は、

飛ばす事が可能』

「ここまでで、質問は？」

「ない」

「ないよー」

「……………ない」

三者三様の答え。

ま、無いなら続けるか。

『パーティーは何人体制でも問題ない。

ただし、必ずリーダー・サブリーダーが必要。

フレンドは、“フレンドカード”を交換することで登録される。

二つとも、メールのやり取りが可能』

「じゃあ、パーティー作るか」

俺はメニューを開き“パーティー設定”を開く。

「リーダーは誰やる？」

その問いに三人は

「セナ」

「セナ君」

「……………セナ」

俺を指名した。

「いいのか？」

全員頷く。

ま、いつか。どうにかなる……………多分。

「じゃあ、副リーダーはマコな。決定」

そう言ってリーダーに俺。

副リーダーをマコに設定して決定ボタンを押す。

メンバーにユナとアキを選択して、完了。

「設定終わったから、続けるぞ」

『この世界にはプレイヤー同士の戦い、
デュエル
決闘を設ける。』

この際に賭けことをしてもよい』

「で、一つ目は終りだ。質問は……………ないな。

二つ目のルールを読むぞ」

『ルール

・NPCを無闇に傷つけてはいけない。

・他人のアイテム・武器・金銭を盗つてはいけない。

・プレイヤーを決闘以外で殺すことを禁じる。

ルール違反をした場合、ペナルティ罰を与える。

なお、この世界で死んだ場合

「どうした？セナ」

「いや、何故かここだけ途切れている」

「本当だ」

まさか……。いや、まさかな……。そんな事は有り得ないと思うが……。

まさかこの世界で死んだら、現実世界でも死ぬわけじゃ、無いよな。

この事は言わないでこつ。

「じゃ、次は武器とかだな。俺から、マコ・アキ・ユナの順番でいいか？」

「それでいいよ」

「問題ない」

「……………異議なし」

本当に助かるな。

前にやったゲームで、いちいち文句を言う奴がいたから、本当に助かる。

「俺のメイン武器は双剣。サブは長銃^{ライフル}」

スキルは“鍛冶屋”と“採取”」

「俺は、メインが両手剣。サブは双銃^{デュアル}」

スキルはDF^{ディフェンス}FF二倍と、HP吸収」

「私は弓矢だよー。スキルは……。これ何て読むの？」

自分の手にA・G・Iと書くアキ。

「それはアジリティって言うんだ」

「へへ。マコ君良く知ってるね。えーっと、

それが二倍と、“MP二倍”だよ」

「……………私は全部アキと同じ」
えーっと、まとめると

俺

メイン 双剣 サブ 長銃

スキル 鍛冶屋 採取

マコ

メイン 両手剣 サブ 双銃

スキル D F F二倍 H P 吸収

アキ

メイン 弓矢

スキル A G I二倍 M P二倍

ユナ

メイン 弓矢

スキル A G I二倍 M P二倍

「んじゃ、これで会議は終了。各自、自由行動で」

その一言で話し合いは終り、アキとユナは部屋を出て行く。

「マコ。お前はどっちに賭ける？」

「じゃ、成功するで。セナは？」

「俺も同じ」

賭けは二人とも成功するに賭けた。

外したら一人旅のこの賭け。

正直、外したくない。

「頑張れよマコ」

「お前もな、セナ」

それだけ言つてマコは出て行く

そして、入れ違うようにユナが入ってきた。

「……セナ。話がある」

「奇遇だな。俺もある」

少しの沈黙。

「……セナ。その……っ、っ……」

ユナはそこまで言い、顔を伏せる。

でも、耳が真っ赤になっていた。

「つ……つき……あ……あ」

ゆっくりと、一言一言に意味を込める様に。
途切れ途切れだけど、はっきりと

「つ……つきあ……ってください……さい」

そう、言い切った。

第六話：メール

「ユナ」

「……………」

「これから、よろしくな」

そう言った瞬間、ユナが勢いよく顔をあげる。

顔は真っ赤になっていて、目には涙を溜めている。

そして、二回、頷く。

その後、俺とユナは時間になるまで話した。

いつから好きだったのか。

趣味はなにか。

元の世界に戻ったら何をするか。
など。

ユナは初めて同じクラスになった、

中学二年の実技の時に、手伝ってもらった時らしい。

対して俺は、同じクラスになってすぐだったけど。

そんな話をしていたら、すぐに時間になって、

アキとマコが二人一緒に入ってきた。

そう、二人一緒に……………だ。

俺はすぐさま、メニューを開きマコにメールを送る。

内容は

「成功したか？」

賭けがどうだったか……………だ。

マコがすぐにメニューを開く。

そして、何か打って、メニューを閉じた。

瞬間、メニューが勝手に開き、メールボックスまで自動的に開く。

これはすごいシステムだな。

関心しながらメールの内容を確かめると
「後で話し合おう」

と返信がきた。

その後、宿屋の人が食事を持ってきたので、
一旦別れて、また後でここに来ようと言って、
俺達は右の部屋に向かう。

「で？話ってなんだ？」

俺は食事　　パンにスープにサラダ
を少し食べてから、マコに聞いてみる。

「実はさ、お前と別れて部屋を出たらアキがいて、
左の部屋に連れていかれたんだ」

「んで？」

「告られた」

言葉が、出なかった。

部屋に連れていかれて告られるって、
いくら何でも突然すぎるだろ。

「いや、だからさ、俺から告れなかったんだ」

「だから？」

「だ、だからさ、賭けは無しで……いいか？」

「マコ」

「わ、分かってる。虫のいい話」

「話を聞け」

その一言でマコは黙る。

「マコ、実はな、俺も同じなんだ」

「え？そうなのか？」

この反応からするに、俺から言うと思ってたのだろうか。
いや、確かに俺から言おうと思ってたけど、
先に言われちゃったからな……。

「俺から言う前に、向こうから言われてしまった」

「俺は、嵐のように突然だったよ」
そう言ってマコは苦笑い。

「この場合賭けはどうなるんだ？」

「……無し……かな？」

「そうか。ま、いいか。今からは攻略について考えるか」

「そう……だな」

ダンジョンがどうゆう所なのか分からないので、

正直に言っと、戦略が立てられないのが現状なんだけど……。

「なあ、セナ。メニューにある、“データベース”ってなんだ？」

「データベース？」

マコに言われ、そんなのあったけなあ？と思いながら、

すぐさまメニューを開き、項目を見る。

すると、前開いた時はなかった、データベースという項目が、確かにあった。

それを選択して、何が書いてあるか見てみる。

そこには

- ・セナ
- ・パーティー
- ・フレンド
- ・ギルド
- ・モンスター

の、五つの項目があった。

「なんだ？これ？」

「上の三つは分かるけど……」

「いや、モンスターも分かるだろ」

問題はギルド。

この項目はどこにもなかった気がする。

そんな事を思っていたら、

データベースの画面からメールボックスの画面まで、一瞬で移動した。

メールが来たらしい。

送り主はユナ。件名はHELP。

なんで英語なんだ？そんな事を思いながらメールを開く。

内容は

「変な奴に絡まれた。すぐに外に来て」

といった、短いものだった。

どうやらマコにも同じようなメールが来たらしく、
なんか殺気？みたいなオーラが出ていた。

「セナ」

「な、なんだ？マコ」

「今すぐ、外に行くぞ」

「あ、ああ」

言葉の中にも殺気が籠っていて、正直戸惑ってしまう。

マコはすぐに立ち上がり、部屋を出ていく。

俺はそんなマコに驚きながら、後をついて行く。

外に出たら、目の前にユナとアキが、

二人の男に話しかけられていた。

俺達はすぐさま間に入る。

「あ、マコ君。遅いよ」

などと、アキは呑気なものであり、ユナは……、

なぜか涙目だった。

「なんだよお前ら、楽しく話してるんだから邪魔すんな」

「ダメレ、コロスゾ」

なぜか俺は目の前にいる奴等二人を今すぐに土に返したいと思っ
た。

なぜつてのは、ユナのこれは嘘泣きだと分かったから。

「は、なめてんじゃねーよ兄ちゃん。」

女の前だからってカツコ付けてんじゃねーよ」

なんか、前にもこんな事あった気がする。

現実の世界での出来事だったけど。

「ナア、マコ。コイツラツブシテイイ？」

「セ、セナ？どうした？」

「コノ、クズドモヲ、ツブシテイイ？」

「おいおい、その君、そこまで言うなら

“決闘^{デュエル}で、賭けをしよう”

決闘って確かプレイヤー同士の戦いだった気がする。

「君達がもし僕達に勝ったら、僕達の持っているお金全額と、

四つの武器から二つ選んで貰って行っても構わない」

つまり、こいつ等が金を一銭も使っていないなら、

最低でも二千ウォンは稼げる。

また、武器なんかは売れるかもしれないので、

手に入れておいて損はなさそうだな。

「あんたらが勝ったら？」

金の計算をしたら話し方が元に戻った。

「簡単な事じゃないか。僕達が勝ったら」

この後のこいつの台詞に、俺達は絶句した。

「そのこの女の子二人を貰う」

第七話：決闘　　（前篇）

このバカは何を言っているんだろう。

金と武器だけでユナとアキを？

本当、どんなバカなんだ？

そんな賭け受けるんでも？

「おいあん

「ちなみに、決闘を断つたら君達はチキンだと広めよう」
デュエル

「よし、その賭け乗った」

各ゆう俺もバカであった。

「ちよつとセナ君！人を勝手に賭けに使わないで！」

案の定アキに怒られる始末。

いや、売り言葉に買い言葉と言っか……。

そんな事を言ったら間違いなく殴られるので、

死んでも言わないが。

「安心しろアキ。マコが何とかする」

「え？俺？」

「マコ君絶対勝つてよね」

「あ、ああ」

そんなマコとアキのやり取りを見て、俺は笑っていた。

不意に、誰かに服を引っ張られる。

そちらを見るとユナが俺の服を掴んでいた。

「どうした？ユナ」

「……………勝たなかったら許さない。

……………勝つても何かしてもらっけど」

「了解」

さて、何をしてあげようかな……………。

考え事が一つ増えたな。

何か出来る事があるかと思いきやメニューを開く。

そして、一つ一つ隅から隅まで見たら、

ステータス画面右下に“技スキル”という項目を見つけた。

「マコ。ステータス開け」

「？分かった」

マコがメニューを開き操作する。

「で？開いたけど」

「右下に技スキルってあるだろ」

「あ、本当だ」

「これは使えるんじゃないか」

「どんなのを見てみるか」

俺もその意見に賛成し、技スキルを開く。

するとそこには

ツインブレイク MP5

と、書かれたのもう一つ。

動画があった。

再生ボタンを押してみる。

動画の初めは黒いコートを被った者が、

双剣を逆手に持ち、腕をある程度広げながら人形に向かって走っ

ていった。

そして、“高速”で腕をクロスさせ、人形を真つ二つにした。

その速さは人が出来るものではない。

動画の最後に、最初の動作をすればあとは自動です。

といったテロップが流れた。

「マコ。お前のどんな技？」

と言い、マコの画面を見る。

そこには両手剣を後ろに引き、剣を“一闪”する動画だった。

でも、その一闪の早さが有り得ないほど速く、鋭い。

そしてテロップが流れて終了。

「これってチートじゃないか？」

「チートではないだろ」

「ま、確かに使えるな」

「MPが減るのは痛いけどな」

「それには同意」

俺とマコがそんな会話をしていると

「君達、もうそろそろいいかな？」

バカが話しかけてきた。

「決闘の形式は？」

「僕は優しいからね、君達に選ばせてあげる」

俺はマコにこれでいいか聞いて、許可を得たので

「一対一のバトル。戦う順番はチームで決める。

もし、一勝一敗なら勝った方同士で戦う。

勝敗はHPが半分になるか降参したら、これでいいか？」

「僕はいいよ。グラディールは？」

グラディールと呼ばれた男は少し考えた末、それでいいと言った。

「それじゃ、始めようか」

「こっちは最初にグラディールが相手をするよ。

決まったら前に出て来てくれたまえ」

「どっちが行く？マコ」

「俺が行ってもいいか？」

「いいよ。でも勝ってくれよ」

「勝たなきゃおかしいって常考」

真剣な顔をしながら、マコは前に出る。

メニューが勝手に開き決闘状と書かれた物が出てきた。それを開き、賭けの内容を確かめ承諾のボタンを押す。

さらに、アイテムボックスを開き両手剣を選択して装備する。
暫くして俺とグラディールの間に数字の五が浮いた。

一回転すると四に、もう一回転して三に。

ゼロになるまで、俺はさっきの映像を頭の中で再生する。

そして、カウントが一からゼロになり、

STARTの文字が浮かんだ瞬間。

グラディールは太刀を持ち走ってきた。

下段からの攻撃を後ろに下がり避け、剣を横に一閃する。

グラディールはそれを剣の先を下にして受け止めようとした。

が、俺の方が力が大きいらしく、グラディールは後ろに後退した。

その瞬間に間合いを詰め、映像の最初の動作、

剣を後ろに引き、技の名前を叫ぶ！

「アルト・スラッシャー！！」

刹那、剣は高速でグラディールの胸を斬りつけた。

グラディールは技を直接喰らって地面に転がる。

「降参してください」

俺はそんなグラディールの首に剣を突き付け脅す。

「わ、分かった。認める。降参だ」

そうグラディールが言った瞬間、俺の目の前に

YOU WIN の文字が浮かびあがった。

剣を仕舞い、セナの方に向かう。

「絶対負けんなよ、セナ」

「誰に言っただ誰に、俺はゲーマーだぞ」

「はは、そうだった。……頑張れよ」

セナは返事をせず歩きながら後ろに手を振った。

相変わらずセナの様子に俺は笑う。

「マコ、大丈夫？ けがはない？」

「大丈夫だから落ち着けアキ。けがは一つもないよ」

「そっか、良かったー」

安心した。そう言ってアキは笑顔になった。

「後は」

「うん、そうだね。後は」

俺達は同時に言う。

それは、名前でも、あだ名でもない。

数十分前に決まった、セナのもう一つの呼び方。

「“リーダー”の働き次第」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560z/>

ブースト・ブレード

2012年1月6日21時51分発行